HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道帝国大学における「自然科学研究所」の設置計画について（1）
Author(s)	佐々木, 朝子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 19, 49-65
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92227
Type	bulletin (article)
File Information	19_03.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜ 研究ノート ＞

北海道帝国大学における「自然科学研究所」の設置計画について（1）

佐々木　朝子

はじめに

北海道帝国大学では、1930年代に「自然科学研究所」の設置を計画した。自然科学研究所について、『北大百年史』は、「一九三一年から、自然科学系研究所設置の要望が、理学部を中心として起こった［中略］同年六月の評議会では［中略］「自然科学研究所」を設置することが発議され、理学部だけでなく他学部からも委員を出して検討することとされた。翌三二年に至って、予算要求を行うこととされ、三四年度概算要求の中に自然科学研究所設置に伴う経費が計上された。しかし、実現を見ることなく、翌年以降の概算要求からは姿を消している」[1] と記述している。

杉山滋郎『雪氷科学者・中谷宇吉郎の研究を歴史的・社会的な文脈に位置づけるための調査研究』（科学研究費研究成果報告書、研究課題番号：25350375、2015年５月）は、第１章で北海道帝国大学に常時低温研究室（1935年設置）と低温科学研究所（1941年設置）が設置された経緯を検討している。杉山は、自然科学研究所の設置計画を常時低温研究室の「伏線となる計画」に位置づけ、主に概算要求書から設置目的や研究テーマを検討しつつ、評議会議事録や理学部教授会議事録に基づき、学内での審議状況を端的に述べている。

自然科学研究所の設置計画は、常時低温研究室や北海道帝国大学の最初の附置研究所である低温科学研究所に繋がるのみならず、設置直後の理学部を中心に、既設の農学部、医学部、工学部と共同で、北海道帝国大学として初めての全学的な研究所を目指した点でも、重要であったと考える。

本稿では自然科学研究所に関する文書を集成し、計画の経過を追う。管見の限り、「自然科学研究所」または関連する「研究所」の設置計画に関する文書は表１の通りである。

表１に列挙した文書は全部で27点あり、議事録が25点、概算要求に関わる文書が２点である。議事録のうち、理学部教授会議事録は15点、評議会記事録が５点、工学部教授会議事録が３点、農学部教授会議事録が２点である。多くを理学部教授会議事録が占めており、理学部教授会が計画の中心を担っていたことがうかがわれる。

また、表１に掲げた文書の内容は、内容研究所の設置案について理学部内で検討したNo.1～ No.6、自然科学研究所の創設について各学部で委員を選出し、委員会の体制を整

えたNo.7～No.16、No.18、各学部選出の委員で協議し、実際に概算要求を行ったNo.17、No.19、No.21～No.27に分類できる。

表１　「自然科学研究所」に関する文書一覧

No.	年月日	資料名	件名
1	1930年９月13日	理学部教授会議事録	協議事項（イ）、（ロ）
2	1930年９月30日	理学部教授会議事録	理学部後年度計画ニ関スル件
3	1930年10月１日	理学部教授会議事録	前日ノ継続 昨日ノ会議ノ引続協議
4	1931年３月11日	理学部教授会議事録	研究所ニ関スル件
5	1931年４月18日	理学部教授会議事録	研究所ニ関スル件
6	1931年４月22日	理学部教授会議事録	其他（ホ）
7	1931年５月20日	評議会議事録	自然科学研究所設置ノ件
8	1931年５月27日	理学部教授会議事録	評議会報告ノ件（ニ）
9	1931年６月18日	工学部教授会議事録	中央研究所創立委員選挙ニ関スル件
10	1931年６月24日	理学部教授会議事録	自然科学研究所設置ニ関スル委員ノ件
11	1931年６月26日	農学部教授会議事録	自然科学研究委員選出ノ件
12	1931年７月２日	工学部教授会議事録	前回以後処理事項報告
13	1931年７月８日	評議会議事録	自然科学研究所理学部委員ニ関スル件
14	1931年９月16日	評議会議事録	自然科学研究所ニ関スル件
15	1931年９月16日	理学部教授会議事録	評議会報告（ハ）
16	1931年10月１日	理学部教授会議事録	報告（ロ）、（ニ）
17	1931年10月７日	理学部教授会議事録	報告
18	1931年10月23日	農学部教授会議事録	自然科学研究委員ニ関スル件
19	1931年	昭和七年度　概算資料	
20	1932年２月12日	理学部教授会議事録	自然科学研究所ノ件
21	1932年２月19日	理学部教授会議事録	自然科学研究所ノ件
22	1932年５月27日	理学部教授会議事録	自然科学研究所研究項目ニ関スル件
23	1932年６月３日	理学部教授会議事録	自然科学研究所研究項目ノ件
24	1932年６月９日	工学部教授会議事録	自然科学研究所創立準備ニ関スル件
25	1932年６月29日	評議会議事録	科学研究所創設ニ関スル件
26	1933年５月17日	評議会議事録	昭和九年度提出ノ予算ニツイテ
27	1933年	昭和九年度 概算要求書	

本稿では、理学部内での協議に関わる文書（No.1～No.6）及び各学部選出の委員会の体制整備に関わる文書（No.7～No.16、No.18）を対象とし、委員会での協議と概算要求については別稿にて扱う。

１．理学部における「研究所」設置構想

１－１．1930年９月13日開催の理学部教授会における議事内容

1930年９月13日開催の理学部教授会[2]には、教授10名（吉田洋一、池田芳郎、中村儀三郎、田所哲太郎、杉野目晴貞、鈴木醇、長尾巧、坂村徹、小熊捍、犬飼哲夫）、助教授６名（河口商次、功力金次郎、茅誠司、中谷宇吉郎、山田幸男、太秦康光）が出席し、教授１名（富永斉）、助教授１名（上床国夫）が欠席した[3]。議題７件のうち７件目の「協議事項」に一括された事項のうち、１、２件目は次の通りである。

七、協議事項

（イ）理学部ニ研究所設置ノ件

具体案ヲ末日ノ評議員（ママ）ニ出スヤウ取計フコト

（ロ）理学部ニ研究所設置ハ昭和七年度本学部ノ完成ヲ俟ツテトリカヽルコト、具体案ヲ考ヘ委員ヲ定ムルヤウニスルコト

協議の結果、（イ）については、具体案を９月末日の評議会に提出するように取り計らうこと、（ロ）については理学部に研究所を設置するのは昭和７年度の理学部の完成を待って取りかかること、そのために具体案を考え、委員を定めるようにすることが決まった。

1930年９月13日開催の理学部教授会以前、1930年８月12日開催の評議会にて、1932年から1943年に至る12年間の大学の拡張計画について当時の総長佐藤昌介より説明があり、理学部には「理科生物研究所ノ建築」が計画されていた[4]。９月13日の理学部教授会で、９月末の評議会に具体案を提出する予定とした「研究所」が「理科生物研究所」を指すのかは不明であるが、次に掲げる９月30日、10月１日に開催された理学部教授会では、「自然科学中央研究所」の原案について協議しており、関連をうかがうことができる。なお、北海道大学大学文書館所蔵の「評議会議事録」によると、1930年の評議会は、８月12日開催の次10月12日に開催されており、９月末頃開催の記録は見えない。

１－２．1930年９月30日開催の理学部教授会における議事内容

1930年９月30日開催の理学部教授会[5]には、教授11名（真島利行、吉田洋一、池田芳郎、中村儀三郎、田所哲太郎、富永斉、杉野目晴貞、鈴木醇、長尾巧、小熊捍、犬飼哲夫）、助教授６名（河口商次、功力金次郎、中谷宇吉郎、太秦康光、上床国夫、山田幸男）が出席し、教授１名（坂村徹）、助教授２名（茅誠司、松浦一）が欠席した。該当の議題は３件中３件目であった。

三、理学部後年度計画ニ関スル件

［中略］

（ロ）自然科学中央研究所原案ニツキ

其目的、所管ニツキテハ原案通リ組織ニ関シテ物理、化学、生物ノ三部ヲ第一

部、第二部、第三部トシ、各部ノ内容ニ付其ノ研究項目ヲ箝入スルコトヲ決定シ本日ノ会議ハ此程度ニ於テ止メ明日午後一時半ヨリ会議ヲ再会[開]シ協議スルコトヲ申合セ散会

９月30日の理学部教授会では、自然科学研究所の目的、所管は原案通りで、組織に関しては物理、化学、生物の３つの部を第一部、第二部、第三部として、各部の内容について研究項目をあてはめると決定し、その日の会議を切り上げ、翌日午後１時半より会議を再開して協議することを申し合わせ、散会した。

９月30日理学部教授会では、計画中の研究所を「自然科学中央研究所」と称している。自然科学研究所を設置する動きが起こった時期について、『北大百年史』通説は「一九三一年から」[6]、杉山は「「理学部後年度計画」の一つとして、1930年９月頃から検討をかさねてきた」[7]と指摘している。

「原案」の内容については添付資料等が見当たらないため、判明するのは三部制の計画であったことのみである。

１－３．1930年10月１日開催の理学部教授会における議事内容

1930年10月１日理学部教授会[8]には、教授11名（真島利行、吉田洋一、池田芳郎、中村儀三郎、田所哲太郎、富永斉、杉野目晴貞、鈴木醇、長尾巧、小熊捍、犬飼哲夫）、助教授６名（河口商次、功力金次郎、中谷宇吉郎、太秦康光、上床国夫、山田幸男）が出席し、教授１名（坂村徹）、助教授２名（茅誠司、松浦一）が欠席した。議題５件中１件目、３件目は次の通りである。

一、前日ノ継続

前日ノ議事録朗読

会議ニ入ルニ当リ先ツ昨日ノ会議録ノ読上ケヲ為シ当会議中ノ自然科学中央研究所原案組織中、物理、化学、生物ノ三部トアルヲ第一部、第二部、第三部トスルコトニ決定トアルハ、決定スルニ至ラサル旨ニ訂正スルコト

［中略］

三、昨日ノ会議ノ引続協議

理学部後年度計画ニ付

（イ）自然科学中央研究所原案中、其目的、自然科学ノ研究ハ特定ノ自然科学（応用的）ノ研究ナルヤ一般的自然科学ノ研究ナルヤノ議ニ対シテハ一般的自然科学ノ研究ナリトスヘキコトニ申合ス（各学部及全図的ニ研究員ヲ網羅スル点ニ於テ頗ル好都合ナル[レ]ハナリ）

（ロ）組織

組織ハ前日協議ノ際三部制ニスヘキカ二部制ニスヘキカニツキテハ二部制トシ、要員ハ各部ニ付適宜按[9]分スルコト而シテ組織中ノ研究項目、部署其他細部ノ点ニ付キテハ委員ニ於テ協議スルコトトシ猶別紙案中 (2) (3) (4) (5) ハ委員

ニ於テ議ヲ練リ協議シ会議ニ報告スルヤウ取計フコトニ決定

（ハ）原案ノ基本財産ノ意義如何

自然科学中央研究所原案経理ノ項目中、基本財産ノ意義如何ニ付キ疑義アリタルモ、本項基本財産トハ本大学基本財産ヲ意味スルモノナルコト

「一、前日の継続」は、1930年９月30日開催の理学部教授会における自然科学中央研究所の組織の名称（第一部、第二部、第三部）の決定を、決定するに至らなかったと訂正した。「三、昨日ノ会議ノ引続協議」は、次のように述べている。「理学部後年度計画」について、（イ）自然科学中央研究所原案のうち「其目的」は、自然科学（研究所）の研究対象が特定の自然科学（応用的）か、一般的な自然科学かという議論に対して、一般的な自然科学の研究であるとするように申し合わせた。その理由は、各学部及び全体的に研究員を網羅する点で非常に好都合だからであった。（ロ）組織は、前日（９月30日）協議した三部制にすべきか二部制にすべきかについては二部制とし、要員は各部について適宜振り分けることとした。そして組織中の研究項目、部署、その他の細部の点については委員が協議することとし、更に別紙掲載の案の中で⑵、⑶、⑷、⑸は委員が議論を練り、協議し、理学部教授会に報告するように取り計らうと決定した。（ハ）自然科学中央研究所原案の「経理」の項目のうち、「基本財産」の項目の意義に疑義が出たが、「本項基本財産」とは北海道帝国大学の基本財産を意味するものであると説明した。

別紙として参照していたであろう「自然科学中央研究所原案」の添付がなく、議事録の記述のみでは議論の把握ができない箇所が多々あるが、自然科学中央研究所の体制は二部制と決定したことがわかる。

１－４．1931年３月11日開催の理学部教授会における議事内容

1931年３月11日開催の理学部教授会[10]への出席者は、教授10名（吉田洋一、池田芳郎、中村儀三郎、田所哲太郎、富永斉、杉野目晴貞、鈴木醇、長尾巧、小熊捍、犬飼哲夫）、助教授８名（河口商次、功力金次郎、茅誠司、中谷宇吉郎、柴田善一、太秦康光、山田幸男、松浦一）で、欠席者は理学部長（真島利行）、教授１名（坂村徹）、助教授１名（上床国夫）であった。３件の議題があり、うち３件目で「研究所ニ関スル件」を審議した。審議内容は次の通りである。

三、研究所ニ関スル件

本案ニ対シテハ総長及真島学部長ヨリモ御話ノアリタル所ニテ来年度予算ニ出シ、寄附ヲ募ルノ方法ノ案、応用科学及純正科学ノ研究ニ適スルモノトシテ、過般協議セル範囲内ニ於テ田所教授カ案ヲ作成シ、協議ヲ経テ本部ニ提出ノ可否ヲ附議ス其結課[果]右案ノ通リニスルコトヲ申合ス

「研究所」設置案については南鷹次郎総長と真島利行理学部長から話があったように、1932年度の概算要求に出し、寄附を募る方法についての案を、「応用科学」及び「純正科学」の研究に適するように、既に協議した範囲内で田所教授が案を作成し、協議の上で本

部に提出することの可否を会議にかけた。その結果、右案の通りにすることを申し合わせた。

総長及び理学部長の話を受けて、３月11日以前より理学部が「研究所」設置の構想について協議を進めていたことが読み取れる。３月11日以前の協議内容に関する資料は見当たらないが、「研究所」の研究分野を狭めず、「応用科学」及び「純正科学」を扱う施設として計画していたことがわかる。

1930年４月18日理学部教授会では、引き続き「研究所」について審議するにあたり、別紙として「北海道帝国大学自然科学研究所」の計画案を添付している。３月11日、４月18日開催の理学部教授会が議題とする「研究所」案は、「自然科学研究所」の設置構想であろう。

「研究所」案の作成を担当した田所哲太郎は理学部で勤務するとともに、農学部農芸化学教室にも兼務していた。田所は1910年７月に東北帝国大学農科大学農芸化学科を卒業[11]後、農芸化学教室の教授として農芸化学第三講座や農芸化学第二講座を担当し、1930年４月に理学部が設置されると、化学科の教授となり、農学部農芸化学科の教授を兼ねた。また、初代理学部長の真島利行は東北帝国大学理学部長を兼ね、仙台にいることが多いため、田所が理学部長を代行した。なお、1931年３月には田所が理学部長となった。

１－５．1931年４月18日開催の理学部教授会における議事内容

1931年４月18日開催の理学部教授会[12]には、教授10名（吉田洋一、池田芳郎、中村儀三郎、田所哲太郎、富永斉、杉野目晴貞、鈴木醇、長尾巧、小熊捍、犬飼哲夫）、助教授８名（河口商次、功力金次郎、茅誠司[13]、中谷宇吉郎、柴田善一、太秦康光、山田幸男、松浦一）が出席した。欠席者は教授１名（坂村徹）、助教授１名（上床国夫）であった。４月18日開催の理学部教授会では３件の議題があり、３件目で「研究所」に関して以下の審議を行った。

三、研究所ニ関スル件

別表ニ付田所教授ヨリ別表ニ付説明内研究費一人宛一万トアルヲ二万円トシ附帯工事費二〇万円トアルヲ二五万円トシ本部ニ提出スルコトヲ申合ス

「別表」について田所教授より説明があり、研究費「一人宛一万円」を「二万円」に、「附帯工事費二〇万円」を「二五万円」と修正して本部に提出することを申し合わせている。

また、1931年４月18日の議事には添付資料として２点の表がある。それぞれ「北海道帝国大学自然科学研究所設置予算案（臨時部）」、「北海道帝国大学自然科学研究所設置予算案（経常部）」と私に標題を付し、掲出する。

表２－１「北海道帝国大学自然科学研究所設置予算案（臨時部）」は、「北海道帝国大学自然科学研究所」の設置に要する経費のうち、一時的に経費を要する「臨時部」の金額と内訳である。「臨時部」に該当するのは「新営費」1,431,200円で、内訳は、研究室と工

場を備えた鉄筋コンクリート三階建の新築とその設備費である。なお、教授会が審議で「二〇万円」から「二五万円」に修正した「附帯工事費」について、表２－１の該当箇所には修正後の値である250,000円の記載がある。

表２－２「北海道帝国大学自然科学研究所設置予算案（経常部）」は、「北海道帝国大学自然科学研究所」の設置に要する経費のうち、設置後に経常的に必要となる予算で、内訳は人件費と校費である。人件費には、教授相当の研究員12名、助教授相当の研究員12名、助手24名、書記２名の俸給84,560円を、「備品費」「図書及印刷費」等に使用する「校費」240,000円を計上している。

表２－１　北海道帝国大学自然科学研究所設置予算案（臨時部）

北海道帝国大学自然科学研究所

区分	金額	備考
臨時部	円	
北海道帝国大学		
新営費	一四三一、二〇〇	〇〇〇
自然科学研究所新営	九四一、二〇〇	〇〇〇

区分	金額	備考
設備費	四九〇、〇〇〇	
	〇〇〇	

内訳					
名称	構造	坪数	単価	金額	備考
研究室並工場	鉄筋コンクリート三階建	延二、一八四坪七二八〇〇	三〇〇円	六六六、二〇〇円	
			〇〇〇	〇〇〇	
汽罐室及煙突	鉄筋コンクリート平家建	三五〇〇		二五、〇〇〇	
				〇〇〇	
附帯工事費				二五〇、〇〇〇	
				〇〇〇	
研究室		三六〇、〇〇〇円	〇〇〇	単位平均額 一二名 三〇、〇〇〇円	
工場		五〇、〇〇〇	〇〇〇		
図書		八〇、〇〇〇	〇〇〇		

〔典拠〕「理学部教授会議事　昭和六年四月十八日」（理（議）／教授会／ 0001-045）より作成。

表２－２　北海道帝国大学自然科学研究所設置予算案（経常部）

区分	金額		備考
北海道帝国大学自然科学研究所			
経常部	円		
北海道帝国大学	二一六、五六〇	〇〇〇	
俸給	八四、五六〇	〇〇〇	内内訳（ママ）
研究員（教授相当）一二名			平均年額 三、〇一〇円
同（助教授相当）一二〃			二、〇七〇〃
助手 二四〃			九〇〇〃
書記 二〃			一、〇〇〇〃
			二、〇〇〇
			三六、一二〇円
			二四八四〇〃
			二一、六〇〇
			四四、〇〇〇円
校費	二四〇、〇〇〇	〇〇〇	内訳
備品費			四四、〇〇〇円
図書及印刷費			二四、〇〇〇〃
消耗費			四八、〇〇〇〃
通信運搬費			九五〇〃
実験費			八四、〇〇〇〃
内国旅費			七、〇〇〇〃
給与			一七、二八〇〃
傭人料			一〇、七七〇〃
被服費			九〇〇〃
雑費			三、一〇〇〃

〔典拠〕「理学部教授会議事　昭和六年四月十八日」（理（議）／教授会／ 0001-045）より作成。
〔注〕誤記と疑わしい数値も全て資料のままとした。

表２－１及び表２－２より、理学部教授会が作成した「北海道帝国大学自然科学研究所」の原案は、工場を備えたコンクリート造３階建の建物に、教授相当の研究員12名、助教授相当の研究員12名、助手24名、書記２名を置く規模であったことがわかる。

１－６．1931年４月22日開催の理学部教授会における議事内容

1931年４月22日開催の理学部教授会[14]には、教授10名（吉田洋一、池田芳郎、中村儀三郎、田所哲太郎、富永斉、杉野目晴貞、鈴木醇、長尾巧、坂村徹、犬飼哲男）、助教授８名（河口商次、功力金次郎、茅誠司、柴田善一、太秦康光、上床国夫、松浦一、山田幸男）が出席し、欠席者は教授１名（小熊捍）、助教授１名（中谷宇吉郎）であった。教授会では、議題全６件のうち６件目「其他」に一括された諸審議事項内で、「自然科学研究所ニ関スル件」を審議している。

六　其他

［中略］

（ホ）自然科学研究所ニ関スル件

別表図面ニ付学部長ヨリ説明ノ後

本研究所設備費トシテ計上セラレアル四九万円ニ付キテハ予算ノ内容ニ付、各科ニ於テ作製、学部長ニ提出スルヤウ取計フコト

「別表図面」について学部長の田所哲太郎より説明を行った後、自然科学研究所の設備費として計上されている49万円について、予算の内容を各学科で作製し、学部長に提出するよう取り計らうことになった。

上記の議事に「別表図面」の添付は無い。ただし、自然科学研究所の「設備費」[15] に関わる取り決めを行っていることから、自然科学研究所の建物の新築について、予算に関する表や設計図面等を説明したと推測できる。

２．各学部からの委員の選出

２－１．1931年５月20日開催の評議会における議事内容

理学部教授会から本部への提出を経て、各学部の代表者からなる大学の意思決定機関である評議会が、「自然科学研究所」について審議を始めた。1931年５月20日開催の評議会[16] には、総長（南鷹次郎）、農学部２名（高岡熊雄、新島善直）、医学部３名（中村豊、今裕、大野精七）、工学部３名（吉町太郎一、倉塚良夫、小川敬次郎）、理学部２名（田所哲太郎、杉野目晴貞）が出席し、議題９件のうち７件目で以下の審議を行った。

七　自然科学研究所設置ノ件

今ヤ本学モ自然科学ノ一体系ヲ成セルヲ以テ茲ニ学内一団トナリ学術振興利用厚生ノ為ニ研鑽ノ歩ヲ進メ特ニ本道ノ豊富ナル天産ヲ利用シ経済上ノ解決機関タラントスルモノニシテ経費約一〇〇万円ヲ以テ研究所設立ヲ提議セルガコノ主旨ニ就テハ何レモ異論ナキ処ナルモ理学部ヲ除ク三学部ハ未研究ニ属スルヲ以テ各学部ヨリ六月中ニ三名宛ノ委員ヲ挙ゲ内容ノ具体的攻究ヲ遂ゲ本問題ノ研究ニ取リ掛ルコトトナル

評議会は、自然科学研究所の意義と今後の計画について、次のように述べている。

北海道帝国大学は自然科学の一体系を形成した。そこで、学内が一団となって学術の振興や便利で豊かな暮らしのために研鑽し、特に北海道の豊富な天然資源を利用して経済上の問題を解決する機関として、経費約1,000,000円で研究所の設立を評議会において提議したところ、主旨に異論はないものの理学部以外の３学部は未検討であったため、各学部から６月中に３名の委員を挙げ、具体的な考究を行い、本問題の検討にとりかかることとなった。

理学部の設置（1930年４月）について、佐藤昌介は、「本学の農医工の三学部は自然科

学の応用を主とするものでその基礎学科は理学部に属する数、物、化、地鉱、生物の諸学科であります［中略］今回本学に理学部を設立するに至つたことは即ち理学部を基礎として既設の三学部が鼎立］[17] することだと説いた。農、医、工学部という応用科学を対象とする学部を既に備えていた北海道帝国大学に、新たに基礎科学を扱う理学部が設置されたことは、自然科学研究及び学部間の関係が体系的に整備されたこととして捉えられていたのである。自然科学研究所の設置案は、理学部の設置を契機として生じたといえよう。

ただし、評議会が述べる自然科学研究所の役割には、理学部教授会での審議には見られなかった、北海道の豊かな天然資源を利用し経済上の問題を解決するという新たな目的が加わっている。また、設置案に関わっていなかった農学部、医学部、工学部も委員を選出するという形で関わることとなった。自然科学研究所の設置は、理学部のみの計画ではなく、全学的な計画として動きはじめた。

２－２．1931年５月27日開催の理学部教授会における議事内容

1931年５月27日開催の理学部教授会[18] には、教授15名（吉田洋一、池田芳郎、中村儀三郎、茅誠司、田所哲太郎、富永斉、杉野目晴貞、太秦康光、鈴木醇、上床国夫、長尾巧、坂村徹、山田幸男、小熊捍、犬飼哲男）、助教授６名（河口商次、功力金次郎、中谷宇吉郎、柴田善一、原田準平、松浦一）が出席した。５件の議題のうち４件目「評議会報告ノ件」には、一括された事項８件中４件目に、次の報告がある。

（ニ）自然科学研究所設置ニ関スル件

自然科学研究所設置ニ付キテハ之ヲ理学部ト各学部共通的ノ研究便益ニ供スル者ナルガ故ニ其ノ目的ヲ達成スルニハ各学部ヨリ六月中ニ委員ヲ挙ゲテ協議スルコトトセリ

自然科学研究所の設置については理学部と各学部の共通の便益に供する施設であるため、目的を達成するには、各学部から６月中に委員を挙げて協議することとしたと、５月20日開催の評議会の審議について報告した。

２－３．1931年６月18日開催の工学部教授会における議事内容

1931年６月18日開催の工学部教授会[19] には、学部長（阿久津国造）他21名が出席し、鷹部屋福平が欠席した。議題３件中２件目は以下の通りである。

二、中央研究所創立委員選挙ニ関スル件

首題ニ就キ学部長ヨリ投票様式ヲ以テ三名連記無記名投票ニ依ルヘキヲ誤リタルモ将来研究ノ熱心ナル希望者ヲ委員ニ挙クヘシトノ提案アリ審議ノ結果協議会ニ諮リ学部長指名トスルコトニ決定、

右ノ結果研究参加希望者ハ予メ申出ツルコトトセリ

上記によると、「中央研究所」創立委員選挙について、投票様式を用いて３名連記で無記名投票を行う予定が、誤りにより投票に不具合が生じたところ、学部長より将来研究熱

心な希望者を委員に選出するべきだと提案があった。審議の結果、協議会に諮り、委員は学部長の指名とすることに決定した。

5月20日開催の評議会により、各学部から自然科学研究所の委員を6月中に選出すると決定しており、時期からみて「中央研究所」は自然科学研究所を指す可能性が高い。また、後に掲げる1931年7月2日開催工学部教授会において、6月18日工学部教授会の協議に基づき選出された3名の委員（三浦勝、鷹部屋福平、宗宮知行）は、1931年10月1日理学部教授会議事録の欄外に工学部選出の自然科学研究所委員として記載がある3名と一致することからも、「中央研究所」は自然科学研究所を指すと考えられる。

2－4．1931年6月24日の理学部教授会における議事内容

1931年6月24日開催の理学部教授会[20]では、教授10名（吉田洋一、中村儀三郎、茅誠司、田所哲太郎、富永斉、杉野目晴貞、太秦康光、鈴木醇、上床国夫、長尾巧）、助教授5名（河口商次、功力金次郎、中谷宇吉郎、柴田善一、原田準平）が出席、教授5名（小熊捍、池田芳郎、坂村徹、山田幸男、犬飼哲男）、助教授1名（松浦一）が欠席し、議題全6件中3件目で理学部から推薦する自然科学研究所の委員について、次のように審議した。

三、自然科学研究所設置ニ関スル委員ノ件

本委員ハ各学部毎ニ三名宛六月中ニ出スコトニ評議会ニ於テ決定シ居ル所ナルガ本学部ヨリハ何人ヲ御願ヒスベキカニツキテハ本学部ハ自然科学研究所設置上ニ付キテハ関係最モ深キモノナレバ本学部ニ限リ委員ヲ増員スルコト即チ学部長ガ六名ヲ出ス様ニスヘキコトニ致度此取計方ヲ本部ヘ交渉スルコトニ申合ス

自然科学研究所設置に関する委員は、各学部3名ずつを6月中に選出することに評議会で決定しているところであるが、理学部からは何人を委員に選出すべきかについては問題がある。理学部は自然科学研究所の設置については最も関係が深い学部であるため、本学部に限り委員を増員すること、つまり学部長が6名を選出することにするべく、取り計らいを本部に交渉することに申し合わせた。

評議会が5月20日に決定し、理学部教授会が5月27日に報告した自然科学研究所設置に関する委員の人数は、理学部も含めて各学部3名であったが、理学部教授会では、理学部が自然科学研究所の設置に最も関係が深い学部であることを理由に、理学部から選出する委員の増員を本部に申し出ることとなった。

2－5．1931年6月26日開催の農学部教授会における議事内容

1931年6月26日開催の農学部教授会[21]には教授21名が出席した。報告9項目の他に、議題が6項目あり、議題の4件目は下記の通りである。

一、自然科学研究委員選出ノ件

各学部ヨリ委員三名ヲ選出シ本月中ニ総長ヘ申出ヅルコトニナリ居ルニ付選出セ

ントス

右ハ投票採決ニ依ルコトニ為シ投票ニ入ラン

開票ノ結果左ノ如シ

高橋教授	一三	松村教授	一一
伊藤教授	一〇	明峰教授	九
時任教授	四	半澤教授	四
市川教授	四	新島教授	三
高松教授	二	須田教授	一
宮脇教授	一	犬飼教授	一

右ニ依リ髙橋、松村、伊藤ノ三教授ニ決定ス

自然科学研究所の委員について、農学部では、12名（高橋栄治、松村松年、伊藤誠哉、明峰正夫、時任一彦、半澤洵、市川厚一、新島善直、高松正信、須田金之助、宮脇恒、犬飼哲夫）を候補者として、投票により高橋栄治、松村松年、伊藤誠哉を選出した。

２－６．1931年７月２日開催の工学部教授会における議事内容

1931年７月２日開催の工学部教授会[22]には、学部長（阿久津国造）他14名が出席し、教授８名（清水義一、倉塚良夫、小川敬二郎、福富忠男、池田芳郎、堀義路、高桑健、久次米三夫）が欠席した。議題２件のうち１件目「前回以後処理事項報告」７件のうち２件目は以下の通りである。

一、研究所参加ノ希望者ハ堀教授、三浦教授、倉塚教授、佐山、高桑教授ノ内一名及電気関係ヨリ一名ノ申出アリ仍テ協議ノ上三浦教授、鷹部屋教授、宗宮教授ノ三氏ニ決定

６月18日工学部教授会の続報で、研究所に参加希望者である堀義路、三浦勝、倉塚良夫、佐山総平、高桑栄松のうち１名と、電気関係を専門とする教官から１名の申し出があり、協議の上、三浦勝、鷹部屋福平、宗宮知行を委員に選出した。

２－７．1931年７月８日開催の評議会における議事内容

1931年７月８日開催の評議会[23]には、総長（南鷹次郎）、農学部３名（須田金之助、新島善直、明峰正夫）、医学部３名（今裕、中村豊、大野精七）、工学部３名（倉塚良夫、小川敬次郎、阿久津国造）、理学部３名（田所哲太郎、坂村徹、杉野目晴貞）が出席し、議題２件のうち２件目に、以下の審議を行った。

一、自然科学研究所理学部委員ニ関スル件

本件ノ委員数ハ前回ニ於テ各学部三名宛ト定メラレタルモ目下理学部ニ於テハ数、物、化、地鉱、動植ノ六学科アリ各科ノ交渉薄ク且専門著シク異ルモノアルヲ以テ特ニ各学科ヨリ一名宛トシ六名外ニ学部長ヲ加ヘ七名ノ学部教授会ノ希望ナリトシ協議ニ附セラレタルガ素ヨリ事業ノ達成ハ専門ノ異ル多数ヲ網羅シテ円

満充実セル雰囲気ヲ醸成スルニ在リ又一面右ハ所謂調査機関ニシテ敢テ学部選出人員ノ多寡ニ依リテ問題ヲ生ズルコトナカルベキヲ以テ一学部ヲ三名トシ理学部ノ七名ヲ認メ尚他学部ニ於テ必要アル場合ニ於テモ所要人員ヲ増加シ得ルコトニ協定成ル

尚自然科学ノ「自然」ハ其ノ儘之ヲ冠シ置クヤ或ハ広ク社会科学ヲモ加ヘテ之ヲ削除スベキヤ及本部ヨリ委員ヲ挙グベキヤ等ニ就テハ九月中旬ノ委員会ニ於テ決定スルコトトナル

自然科学研究所の委員数は、前回（５月20日開催）の評議会で各学部３名と定められたが、目下理学部には数学科、物理学科、化学科、地質学鉱物学科、動植物学科の６学科があり、各学科の関わりは薄く、かつ専門が著しく異なるため、特別に各学科から１名ずつ計６名を選出し、その他に学部長を加えた７名が理学部教授会の希望であると協議に附したところ、事業の達成のために専門分野の異なる多くの人々を網羅して円満かつ充実した雰囲気を醸成すること、また一面として、自然科学研究所の委員はいわゆる調査機関であり、人数の多寡により意思決定に不公平が生じることはないだろうことから、１学部につき３名とし、理学部の７名を認め、なお他学部で必要がある場合においても所要人員を増加できることで協議が成立した。なお、自然科学研究所の「自然」はそのまま冠しておくかあるいは広く社会科学をも加えて「自然」を削除するべきか、また本部から委員を選出すべきか等については９月中旬の委員会で決定することとなった。

評議会では①６月24日理学部教授会の審議に基づく委員増員の申し出の可否、②「自然科学研究所」の研究対象を社会科学にも広げ、施設名を「科学研究所」に変更することの是非、③学部のみならず本部からも委員を選出するかどうかという３点の審議を行った。

①については理学部教授会からの要求を認めた。理由の一つは、自然科学研究所の設置に向けて円満かつ充実した雰囲気を醸成するために、専門の異なる多くの人々を網羅するという方針である。既に５月20日開催の評議会において、自然科学研究所の設置目的に、様々な学部や学科、専門分野を含む学内で「一団トナリ学術振興利用厚生ノ為ニ研鑽ノ歩ヲ進メ」るという目的を掲げており、理学部の学科間の交渉が少ないことから、より広く学内の関係者が加わるようにする狙いがあった可能性がある。また、もう一つの理由は、自然科学研究所の委員会が、「調査機関」であることであった。

②、③は７月８日評議会で初めて確認できる提案で、結論は９月中旬の評議会まで持ち越しとなった。

２－８．1931年９月16日開催の評議会における議事内容

1931年９月16日開催の評議会[24] には、総長（南鷹次郎）、農学部３名（須田金之助、新島善直、明峰正夫）、医学部１名（中村豊）、工学部３名（阿久津国造、倉塚良夫、小川敬次郎）、理学部３名（田所哲太郎、坂村徹、杉野目晴貞）が出席し、議題３件のうち１件目に、以下の審議を行った。

一、自然科学研究所ニ関スル件

前回（七月八日）ノ会議ニ於テ宿題トセラレタル自然科学研究所ノ「自然」ノ二字ノ取扱ニツキ協議セルガ右ハ広ク応用方面ヲモ包含セル自然科学ノ義ト解シ其ノ儘トスルコト及本部ヨリノ委員ハ之ヲ幹事ノ名称トシ三名ヲ任命シ其ノ中一人ハ委員中ヨリ兼任スルコト及一名ノ書記ヲ置クコトトナル

前回開催の評議会で宿題とされた施設名「自然」の２文字の扱いについて協議したところ、右（「自然」の２文字）は広く応用方面をも包含する自然科学の意味と解し、そのままにすること、また、本部から選出する委員の名称を「幹事」とし、３名を任命し、その中の一人は委員の中から兼任すること、また、一名の書記を置くことが決定した。

７月８日開催の評議会では２点の審議が９月16日開催の評議会まで持ち越しとなっていた。

１点目として、自然科学を研究対象とする「自然科学研究所」に代えて、自然科学のみならず社会科学をも対象とする「科学研究所」を設置するという提案がなされていた。1931年当時、北海道帝国大学の社会科学に属する専門分野には既に農学部農業経済学科があった。また、文学部、政経学部、法学部の創設を計画しており[25]、全学的な組織である研究所に社会科学に属する専門分野を含めることは可能であったと考えられるが、結局、研究所の研究対象は自然科学とし、名称も「自然科学研究所」のままにすることとなった。

２－９．1931年９月16日の理学部教授会における議事内容

1931年９月16日開催の理学部教授会[26]には、教授13名（吉田洋一、池田芳郎、中村儀三郎、茅誠司、田所哲太郎、富永斉、杉野目晴貞、太秦康光、上床国夫、坂村徹、山田幸男、小熊捍、犬飼哲男）、助教授７名（河口商次、功力金次郎、中谷宇吉郎、柴田善一、原田準平、松浦一、内田亨）が出席し、教授２名（鈴木醇、長尾巧）が欠席し、議題全３件のうち１件目に以下の報告を行った。

一、評議会報告

［中略］

（ハ）自然科学研究所準備委員ノ件

自然科学研究所準備委員ハ本学部ヨリ七名出スコトヲ評議会ニ於テ承認セラル、尚ホ他ノ学部ハ三名宛認メラレタレド必要アル場合ニ於テハ三名以上トスルヲ得ルヤウ認メラル而シテ右委員ハ本月中旬ニ於テ纏マルコト、思ハル

自然科学研究所準備委員は、理学部から７名を選出することが評議会で承認された。なお、他の学部は３名ずつと認められたが、必要がある場合には３名以上とすることができるように認められた。そして、自然科学研究所準備委員は今月中に纏まることと思われる、という評議会での審議が理学部教授会で報告された。

２－10. 昭和 6年10月１日開催の理学部教授会における議事内容

1931年10月１日開催の理学部教授会[27] には、教授９名（吉田洋一、池田芳郎、茅誠司、田所哲太郎、杉野目晴貞、太秦康光、鈴木醇、長尾巧、坂村徹）、助教授５名（河口商次、功力金次郎、中谷宇吉郎、原田準平、松浦一）が出席し、教授７名（山田光雄、中村儀三郎、富永斉、上床国夫、山田幸男、小熊捍、犬飼哲男）、助教授２名（柴田善一、内田亨）が欠席した。研究所については１件目の報告事項全６件中２、６件目に報告があった。

一、報告

［中略］

（ロ）自然科学研究所ニ関スル件

（一）名称ノ可否　（二）自然科学研究所ハ学術ノ応用ヲ含ムヤ、ニ就キテハ名称ハ自然科学研究所トスルコト、応用ヲ含ムコト

又委員ハ理学部ヨリ七名、各学部ヨリ三名宛、コノ外幹事ニ本部事務官、会計課長ヲ、書記ニ本部庄子書記ヲ委嘱スルコト

［中略］

（二）、自然科学研究所委員会ノ件

（イ）委員中ヨリ幹事一名ヲ出スコトニハ選挙結果小熊教授当選

（ロ）委員長ハ選挙結果田所教授当選

（ハ）自然科学研究所ヲ如何ニシテ作ルベキカニ就キテハ理学部ニ於テ案ヲ出スコト、其ノ原案ハ曩ニ理学部ニ於テ第一回に作成シタルモノ（予算面ノ大キナモノ）ニ依テ作ルコト

尚ホ三日ニ小熊教授ノ帰学ヲ待ツテ協議ノ上案ヲ作リ委員会ニ提出シ又教授各位ニモ配布スルコト

本議事は、記録に「北海道帝国大学理学部」の罫紙を使用しており、罫線の枠外上部には鉛筆により以下の書き込みが見られる。

自然科学研究所委員／農／松村教授／伊藤教授（誠哉）／高橋（栄）教授／医／児玉教授／木下教授／井上（善）教授／工／三浦教授／鷹部屋教授／宗宮教授[28]

自然科学研究所について、（一）名称の可否、（二）研究対象には学術の応用を含むかという２点については、応用を含み、施設の名称を「自然科学研究所」とすることを決定した。また、委員は理学部から７名、農、医、工学部から３名ずつを選出し、このほかに幹事として本部事務官、会計課長、書記として庶務課の庄子栄三郎書記を委嘱することを決定した。

また、欄外の書き込みによると、自然科学研究所の委員は農学部が松村松年、伊藤誠哉、高橋栄治を、医学部が児玉作左衛門、木下良順、井上善十郎を、工学部が三浦勝、鷹部屋福平、宗宮知行を選出した。

２－11. 1931年10月23日開催の農学部教授会における議事内容

1931年10月23日開催の農学部教授会[29] では、教授25名が出席した。報告１件、議題４件のうち、議題の４件目は以下の通りである。

一、自然科学研究委員ニ関スル件

自然科学研究委員ナル松村教授今回辞任セラレタルガ其ノ補欠ヲ如何スベキヤ。

右ハ先般選挙ノ際次点者ヲ以テ補欠スルコトニ万場異議ナク明峰教授ニ決定

自然科学研究所の委員を務めていた松村松年の辞任により、選挙の際に次点であった明峰正夫を補欠とすることに決定した。

おわりに

理学部、農学部、工学部の教授会議事録及び評議会議事録に基づいて、自然科学研究所の設置計画の推移をたどってきた。

自然科学研究所の設置を計画したのは主に理学部であった。理学部の設置から４か月後の1930年８月12日には、既に理学部に「理科生物研究所」を設置する計画が存在した。「理科生物研究所」と自然科学研究所の関係は明らかでないが、理学部の設置直後から研究所を設置する計画があったことがわかる。1930年９月30日から10月１日の理学部教授会では「自然科学中央研究所」の原案について協議を行っており、既に「理科生物研究所」から「自然科学中央研究所」に施設名が変更されていた。翌1931年３月から４月にかけて、理学部教授会は研究所の原案を審議した。原案では、鉄筋コンクリート造３階建の建物に、教授相当の研究員12名、助教授相当の研究員12名、助手24名、書記２名を置く規模の計画であった。

理学部教授会で作成した自然科学研究所の原案をもとに、1931年５月20日開催の評議会で協議を行った結果、自然科学研究所を全学的な研究所とするため、理学部、農学部、医学部、工学部から委員を選出し、委員会を組織することとなった。1931年６月から10月にかけて、各学部及び本部で、自然科学研究所の委員を選出した。結果、理学部が学部長及び数学科・物理学科・化学科・地質学鉱物学科・植物学科・動物学科から各１名、農学部から伊藤誠哉、高橋栄治、松村松年及び補欠として明峰正夫を、医学部が児玉作左衛門、木下良順、井上善十郎を、工学部が三浦勝、鷹部屋福平、宗宮知行を選出した。

自然科学研究所の研究対象や、研究対象と委員との関わりについては今後の課題とし、1931年10月以後の資料をまとめたい。

［注］

1）『北大百年史』通説、北海道大学、1982年、269ページ。
2）「会議決定事項　昭和五年九月十三日」（理（議）／教授会／0001-018）。以下、理学部教授会議事録、評議会議事録、農学部教授会議事録、工学部教授会議事録の所蔵先はいずれも北海道大学大学文書館。
3）以下、「教授」「助教授」等の職名は、『北海道帝国大学一覧　昭和五年』及び『北海道帝国大学一覧　昭和六年』の「職員」欄に基づく。
4）「評議会記録　昭和五年八月十二日」（事務局（議）／評議会／0001-25）。
5）「会議決定事項　昭和五年九月三十日」（理（議）／教授会／0001-020）。
6）『北大百年史』通説、269ページ。
7）杉山滋郎「雪氷科学者・中谷宇吉郎の研究を歴史的・社会的な文脈に位置づけるための調査研究」（科学研究費成果報告書、研究課題番号：25350375、2015年５月）３ページ。
8）「会議決定事項　昭和五年十月一日」（理（議）／教授会／0001-021）。
9）原資料の表記は手偏に「案」。
10）「会議事項　昭和六年三月十一日」（理（議）／教授会／0001-042）。
11）『東北帝国大学農科大学一覧　自明治四十三年至明治四十四年』、東北帝国大学農科大学、1910年12月、146ページ。
12）「会議事項　昭和六年四月十八日」（理（議）／教授会／0001-045）。
13）1931年５月９日に教授に昇任した（「退職者履歴資料二四、昭和18」、北海道大学大学文書館蔵、169ページ）。
14）「会議事項　昭和六年四月二十二日」（理（議）／教授会／0001-046）。
15）1931年４月18日理学部教授会議事の添付資料で、自然科学研究所の建物の新営費を示す「北海道帝国大学自然科学研究所設置予算案（臨時部）」（表２－１）では「設備費」の項目に「四九〇、〇〇〇〇〇〇」と記載しており、1930年４月22日理学部教授会議事の「本研究所設備費トシテ計上セラレアル四九万円」と金額が合致する。
16）「評議会記録　昭和六年五月二十日」（事務局（議）／評議会／0001-33）。
17）「式辞」、1930年10月６日付『北海道帝国大学新聞』２面。
18）「会議事項　昭和六年五月二十七日」（理（議）／教授会／0001-050）。
19）「工学部第二百六回教授会議事　昭和６年６月18日」（工（議）／教授会／0007-８）。
20）「会議事項　昭和六年六月二十四日」（理（議）／教授会／0001-053）。
21）「農学部教授会議事　昭和６年６月26日」（農（議）／教授会／0006-52）。
22）「工学部第二百七回教授会議事／昭和６年７月２日」（工（議）／教授会／0007-９）。
23）「評議会記録　昭和六年七月八日」（事務局（議）／評議会／0001-35）。
24）「会議事項　［昭和六年］九月十六日」（理（議）／教授会／0001-055）。
25）『北大百年史』通説、北海道大学、262-263ページ。
26）「会議事項　［昭和六年］九月十六日」（理（議）／教授会／0001-055）。
27）「教授会事項　昭和六年十月一日」（理（議）／教授会／0001-056）。
28）改行はスラッシュで示した。
29）「農学部教授会議事　昭和６年10月23日」（農（議）／教授会／0006-56）。

（ささき　ともこ／北海道大学大学文書館員）